

相模湾で採集されたオオウスエボシ (蔓脚目: ヒメエボシガイ科)

倉持 卓司

Takashi Kuramochi: *Octolasmis weberi* (Thoracica: Poecilaspidae)
Collected from the Coast of Sagami bay, Kanagawa Prefecture

はじめに

オオウスエボシ *Octolasmis weberi* (Hoek, 1883) は、腔腸動物に固着寄生する生態をもつヒメエボシガイ科の一種である。本種の相模湾からの採集記録は、弘 (1937) 以後みられない。本報告では、相模湾より採集されたオオウスエボシをもとに行った日本近海より報告されている近似種との比較検討の結果を予察的に報告する。

本報告にあたり、試料を提供していただいた高橋一夫氏、ご助言をいただいた葉山しおさい博物館の池田 等氏に感謝申し上げます。

検討試料

オオウスエボシ *Octolasmis weberi* (Hoek, 1883)

(図 1)

産地: 神奈川県鎌倉市材木座海岸 (打ち上げ採集)

頭状部長: 1.9 ~ 14.8 mm 4 個体

記載

頭状部は扁平。半透明で厚い外皮に埋没した殻板は 5 箇所に離れて有する。生時には各殻板は、外皮と共に鮮赤色。アルコール標本では退色しオレンジ~白色に変化する。楯板は L 字形。背板の殻頂は頭状部の頂端よりもやや楯板側に偏在する。背板には深い三角形の陥入が 2 箇所にみられる。閉塞縁は三角。峰板は長く、強く彎曲し、下端がへら状になる。峰板縁は平滑。柄部は太く、横襞を有す。頭状部のおよそ 1/2 の長さ。

分布

相模湾, 熊野灘, 田辺湾, 中国沿岸, マレー群島の水深 2 ~ 30 m 付近に生息するウミヤナギ類 *Virgularia* sp. の骨軸に付着する (弘, 1937; Ruiyu & Xianqiu, 1985)。



図 1. オオウスエボシ *Octolasmis weberi* (Hoek, 1883) 1a: 全形 1b: 殻板の配置
産地: 神奈川県鎌倉市材木座海岸 (スケールバー: 10 mm)

比較

日本周辺海域に生息するウスエボシ (*Octolasmis*) 属は, Hiro (1937) および弘 (1937) により分類学的な検討が行われ, ベイガタウスエボシ *O. clavula* Hiro, オノガタウスエボシ *O. warwicki* Gray, アブミウスエボシ *O. nierstraszi* (Hoek), ウスエボシ *O. orthogonia* (Derwin), オオウスエボシ *O. weberi weberi* (Hoek), ヤナギウスエボシ *O. weberi pennatulae* Hiro, ミツマタウスエボシ *O. grayi* (Daewin), エラエボシ *O. aymonini* (Lessona et Tapparone-Canefri), ソリエラエボシ *O. angulata* (Aurivillius) の 8 種 1 亜属が報告されている。弘 (1937) の日本産ウスエボシガイ属の分類に従えば, 相模湾からはウスエボシ, オオウスエボシ, ヤナギウスエボシ, エラエボシの 3 種 1 亜種の分布が記録されている (Utinomi, 1967; 池田ほか, 2000)。弘 (1937) の分類では, オオウスエボシは, 中型 (頭甲部長 10mm 以下) で, 背板の頂部が尖り, 背板にみられる 2 箇所の三角形の陥入は浅いものに対して, ヤナギウスエボシは, 大型 (頭甲部長 16 mm 以下) で, 背板の頂部は尖らず, 2 箇所にみられる三角形の陥入が深いとしている。また, ウスエボシは, 小型 (頭甲部長 7 mm 以下) で, 背板の頂部が尖り, 2 箇所にみられる三角形の陥入は深いことから, オオウスエボシとヤナギウスエボシとは, 別種として扱っている。また, Hiro (1937) は, ヤナギウスエボシは, オオウスエボシと中間的な背板をもつ個体があるが, 両種が異なる腔腸動物に固着寄生を行う生態をもつことを別亜種に分類した根拠としている。

ウスエボシガイ属の種分類は, 種・亜種レベルで研究者により意見が相違し, Broch (1931) は, ウスエボシとオオウスエボシが共通したヒドロ虫やヤギ類などに固着することから, これら 2 種類を同種として扱っている。また, Ruiyu & Xianqiu (1985) も, 弘 (1937) の報告したヤナギエボシは, 背板の形状に連続的な変異が認められることからオオウスエボシの種内変異としている。

今回, 相模湾より採集された検討試料は, Hiro (1937) により記載されたヤナギウスエボシの背板の形状と一致する。この背板の形状は, 今回採集された, すべての個

体で, ほぼ同じ特徴を有していることから, 本種の背板の形状は, 成長に伴い背板の形状が変化するものではないと推測される。しかし, Ruiyu & Xianqiu (1985) が指摘しているように, 多数の標本を検討するとオオウスエボシとヤナギウスエボシの背板の形質は, 中間的な形質をもつ個体が見いだされることから, 本報告では, Ruiyu & Xianqiu (1985) の分類に準じヤナギウスエボシをオオウスエボシと同一種と考える。

ウスエボシ属に共通してみられる背板形質の変異は, 本属群の種類が, いずれも他の生物を付着基質として利用することから (弘, 1937 など), 同一種が異なった付着基質・付着部位に固着するために付着基質に対して形態を変化させ適応している可能性が考えられる。今後は, 遺伝的な検討も含め, さらに多くの標本を用いた本属の分類学的再検討が望まれる。

引用文献

- Broch, H., 1931. Papers from Dr. Th. Mortensen's pacific expedition 1914-16. LVI. Indomalayan Cirripedia. Vidensk. Medd. Fra. Dansk naturh. Forening, 91: 1-146.
- Hiro, F. 1937. Studies on Cirripedian fauna of Japan. II. Cirripeds found in the vicinity of the Seto marine biological laboratory. Mem. Coll. Sci. Kyoto Imp. Univ., Ser. B, 12(3): 385-478.
- 弘 富士夫, 1937. 完胸目 I . 日本動物分類, 9(5), 116pp. 三省堂, 東京.
- 池田 等・倉持卓司・渡辺政美, 2000. 相模湾より採集されたエボシガイ類. 神奈川自然誌資料, (21): 41-44.
- Ruiyu L. & Xianqiu R. 1985. Studies on Chinese Cirripedia (Crustacea) VI . Subordea Lepadomorpha. Studia marina Sinica, 25: 179-279.
- Utinomi, H. 1967. Comments on some new and already known cirripeds with emended taxa, with special reference to the parietal structure. Publ. Seto Mar. Biol. Lab., (15): 199-237.

(横須賀市芦名 2-6-3-504)